

映画史に残る不朽の名作
 本学図書館の所蔵本から (4)
 _____ 吉田明弘 23

これぞ本学図書館の主題別書誌データベース③
 「世界へ広がる古典籍」
 _____ 藤田眞壽美 24

日本の歴史60
 『境界の日本史：地域性の違いはどう生まれたか』
 _____ 稲垣宏行 25

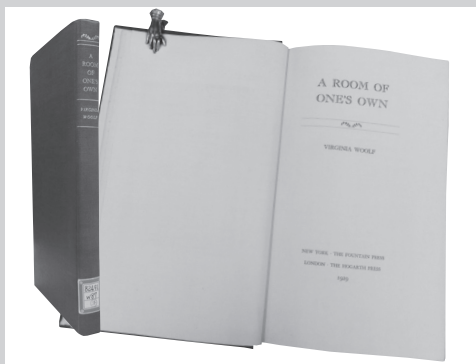
文献紹介 (6)
 中国史いろいろ 呼び名の話
 _____ 戸田奈緒子 26

文献紹介
 NVCの世界
 非暴力コミュニケーションへの誘い
 _____ 寒川奈緒子 27～29

Book Review Corner _____ 30～31

● 図書館利用案内 ●

ライブラリー・カレンダー
 2019 (10月～12月) _____ 32



WOOLF, Virginia
A Room of One's Own
 New York, 1929

ウルフ
 『自分だけの部屋』

ヴァージニア・ウルフ (1882-1941)はイギリスの女流小説家で、世紀の大事業『英国人名辞典 *Dictionary of National Biography*』の編纂を主宰したレスリー・スティーヴン (Leslie Stephen) の娘です。1912年、評論家レナード・ウルフ (Leonard Woolf) と結婚しましたが、この結婚は彼女を「家庭という尼寺」に押し込めはしませんでした。彼女は政治と音楽に深い興味を持ち、妻の天分を信じた夫と共同経営した出版業を通して更に広い視野と豊かな経験を得ることになりました。

本書は1928年10月、ウルフがケンブリッジのニューナム女子寮の芸術クラブとガートン女子寮のオッドター・クラブ (The Arts Society of Newnham and the Odtaa at Girton) の女子学生を対象に、「女子と小説」という題目で講演を求められ、その原稿に多少の手を加えて、翌1929年に出版したものです。

この作品は、ウルフの180篇にものぼる評論中、最長篇の一つで、彼女の社会評論家としての意見、特に婦人問題に関する批評家としての態度を知るには必読の書です。女性と文学との関係を男性に対する皮肉を交えながら、軽妙な筆致で述べています。本題は「女性と文学」ですが、その内容は英国の女流作家に対する歴史的な批評、いわばイギリス女流作家の受難史で、「女性には奴隷ほどの知的自由もなかった」と述べ、そのような社会の中で、ジェーン・オースティン、エミリー・ブロンテ姉妹などが如何に女性の身で、人をうらまず、男性を真似ず、自らの文学を書いてきたかを賞讃し、女性が今後文学を生み出すには、ぜひとも年間500ポンドと自分だけの部屋が必要であると力説しています。

小説家としての彼女は所謂意識の流れの手法を確立した作家として、その心理の内面的描写と詩的な文体とで英国小説史に不朽の足跡を残しましたが、『ダロウェイ夫人 *Mrs. Dalloway*, 1925』、『燈台へ *To the Lighthouse*, 1927』、『波 *The Waves*, 1931』などが傑作とされています。

因みに、本書は450部限定出版されたうちの1冊 (No.50) で、著者の署名が入っています。